

長編青春小説

青山物語

清水義範

1974

スニーカーと文庫本



光文社文



光文社文庫

長編青春小説

青山物語 1974

著 者 ^し清 ^{みず}水 ^{よし}義 ^{のり}範

1995 年 8 月 20 日 初版 1 刷発行
2004 年 1 月 5 日 2 刷発行

発行者 八 木 沢 一 寿
印 刷 公 和 図 書
製 本 関 川 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽 1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Yoshinori Shimizu 1995

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-72090-0 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

JASRAC 出第 9561065-302 号

光文社文庫

長編青春小説

青山物語1974

スニーカーと文庫本

清水^{よしのり}義範



光 文 社

目次

第一章 三年目 7

第二章 スプーン曲げ 51

第三章 SFコンテスト 97

第四章 にぎやかな夏 141

第五章 青春時代 185

第六章 離陸 231

あとがき

解説 花田 吾一 277

はなだごいち

本文イラストレーション／松本孝志

青山物語 1974

スニーカーと文庫本

第一章

三年目



一月十五日。成人の日だから会社は休みである。一九七四年（昭和四十九年）のことだった。東京都大田区上池台にある、四畳半一間の下宿で、午前十一時ごろに平岡義彦は目を覚まそうとしてそれができなかった。正確に言うと、眠りからは覚めたのだが、目を開くことができなかったのである。

両眼の、上の瞼と下の瞼がピッタリとはりついてしまっていて離れないのだ。間にほんの少し隙間があつて、そこから黄色っぽい光が薄くさしている。

どうしちゃったんだろう、と思った。眠っている間に瞼を接着剤でふさがれてしまったみたいな具合なのだ。

体じゅうに、びっしりと汗をかいていた。頭の芯がブーンと鈍く音を立てて何かと共鳴しているような気がし、口の中が薬品臭いような気がした。ものすごくだるい。

義彦は手の甲で自分の目をぬぐった。バラバラと黄色い粉のようなものが落ち、やっと目を開くことができた。

その黄色い粉が何であるかを知って、ギョッとした。それは乾ききったためやにだった。とんでもないことになりかけている、と思った。眠っている間にめやにが出て、それが固

まって、目が開けられなくなっていたのだ。

もちろんそんなことは生まれて初めてだった。

体がびっくりするほど熱かった。そして、めちゃくちゃだるい。それだけでなく、胸と、足のつけ根あたりで、筋肉がピリピリと痛んでいた。手で触れたら、直接に神経細胞を逆なでするような感じがするんじゃないかと思える痛さだった。

額から、脂っこい汗がぬるぬると流れ落ちていく。

風邪をひいたんだ、と平岡義彦は思った。

独身男のわびしい生活の中で、最もみじめな事態のひとつである風邪ひき。

いや、場合によってはみじめぐらいではおさまらず、悲惨、哀れ、悲劇的と形容してもいいのが独り住まいの風邪ひきである。

やられたな、と義彦は思った。

世間に大いに風邪がはやっているらしく、ゴホンゴホンやっている人をたくさん見る。そういう人からうつったのだ。

そして、ゆうべの夜ふかしがいけなかった。

せんべい蒲団ふとんの枕元に、新書判の小説がころがっている。明日は休日だからと、ゆうべ蒲団に入ってから読み始め、三時半までかけて読了した。小松左京こまつさきやうの『日本沈没』の下巻である。途中で、部屋の外の共同トイレに行ったとき、なんとなく肌寒くてくしゃみがしきりに出た。

なのについつい最後まで読んでしまったのだ。頭の中に、世界じゅうに散らばった日本人たちのイメージを浮かべながら。

そうしたら、いきなりガツンと来てしまったのだ。それもどうやら、大型で強い勢力の風邪っていう雰囲気である。

自分の吐く息が熱いと感じられる。そのくせ、背中のあたりはゾワリと軟体動物がはっているような感じに冷たい。

義彦は起きあがろうとし、軽くめまいがするのに気がついた。体が普段の倍の重さを感じられる。

スチール書棚の上の、常備薬が置いてあるところを見てみるが、あるのは太田胃散と百草丸とマキロンとアンメルツだけで、風邪薬はなかった。体温計を出してそれを脇の下にはさみ、また蒲団にもぐりこむ。

体温は三九度五分あった。

自己最高記録ではないか、と思った。だからもう何もしたくないほどにぐったりしているのだ。ひたすら寝ていたい、それ以外に何ができようかと目を閉じた。

そんなひどい風邪をひくのは初めてのことだった。義彦は身長がまあ人並みなのに体重が五十キロを割っているという痩せっぽちで、どう見ても遅くそうではない。なのに、案外健康でそんなに大きな病氣はしたことがなかった。風邪だって一年に一度ひくかどうかといふところ

である。高熱を出したことなんてほとんどない。

それが、三九度五分である。目を開けるとわびしい四畳半の天井の光景の中に白い斑点がいくつも飛んでいるという状態だ。

休日ではよかった、と思った。これはもう、ただ一日ぐったりと寝ているしかしかたがあるまい。そして、少しは熱が下がったら長原駅（東急池上線ながはらの駅。下宿から歩いて五分）前へ行つて何か栄養のあるものを食べ、薬局で風邪薬を買ってくることにしよう。それまでは睡眠をとる以外にない。

窓の外はどんよりと曇って、いかにも寒そうな日である。だが暖房装置としては、蒲団の脇に押しのけてある電気ごたつしかなくて部屋をあたためることはできない。風がガラス戸をガタガタといわせるのがやけに意地悪くきこえる。

小便がしたくなり、義彦は部屋を出た。出て廊下のすぐ右に、四部屋の下宿人が共同で使うトイレがあり、そこに入った。

意識がなんだかぼんやりしているので、いつもは何とも思わないものが変に気に止まったりする。

トイレット・ペーパーのホルダーの上に貼り紙がしてあり、大家の字でこんなことが書いてある。

「一回につき十五センチまで」

去年の暮れに、突如出現した貼り紙だった。

一回のトイレット・ペーパー使用量を、十五センチ以下にしてくれ、という通達なのである。今、世の中で最も貴重なのはトイレット・ペーパーなのであるから。

石油ショックとか、オイルショックと呼ばれている、日本経済にとっての未曾有の^{みぞう}大事件が、去年の十一月に起こったのだ。どういふことかというところ、石油輸出機構というところが、石油の値上げと、生産制限を打ち出した。それによって、日本のように全面的に石油を輸入に頼っている国は経済的な大打撃を受け、ほとんどパニック状態になってしまったのである。

まさにパニックだった。政府は省エネを提唱し、マイカーが自粛され、街のネオンは十時で消え、会社の蛍光灯は半分が消され、三十ワットの蛍光灯は二十七ワットになり、スイッチを入れるとすぐ映るテレビは電力消費が大きいからと、ぼやんと映るものに改良（改悪？）され、日本じゅうに不景気風が吹きまわった。

そしてこのとき、あとから振り返ってみれば笑ってしまふしかない出来事として、買いだめと、売りおしみが発生したのである。

石油が不足すれば値上がりするから、という噂があつという間に広がり、日本じゅうで主婦がトイレット・ペーパーと洗濯用洗剤を買いまくったのだ。あつという間にスーパーからトイレット・ペーパーが消えた。それを押入れいっぱいいためた人なんてのがいた。

なぜ洗剤とトイレット・ペーパーだったのかは永久の謎である。とにかくそれ以来トイレッ

ト・ペーパーは貴重品となり、一回十五センチ以下に、ということになったのである。

とんでもない時代であった。

そのとんでもない時代に、われらが主人公の平岡義彦は風邪をひいてダウン寸前である。

2

トイレで用をすまし、部屋に戻ったついでに義彦は下着を新しいものととり替えた。汗でぐっしょり濡れていた下着を乾いたものにして少し気分がよくなる。

それから、少しは何かを食べたほうがいいだろうと、冷蔵庫の中をのぞいてみる。すぐ食べられそうなものは何も入っていない。

インスタント・ラーメンと、加熱するだけで食べられるスパゲティと、キャベツと玉ネギと、スライスハム二枚だけである。

どんな簡単な料理もだるくてできない気分だったので、彼はハムを取り出した。まず匂いをかいでみる。たぶん、傷んでないだろう。

そのハムに塩をふって口に入れる。

味がまるでわからなかった。なんだか粘土を食べているような気がした。熱で味覚がおかしくなっているのだ。のみこむのが苦しかった。

結局、ハムは一枚しか食べられなかった。なんだかすぐにも吐き出しそんな感じさえする。

「ダメだ、こりゃあ」

と義彦は声に出して言った。独り住まいの人間は、よく独り言を言うのだ。

そして、言ったとたんに本当に何もかもダメなような気がしてきて、めっちゃくちや心細くなってしまった。

蒲団にもぐりこむ。すると今度は、全身がゾクゾクと寒いような気がしてきて、蒲団を頭までかぶった。

膝を曲げ、横むきの姿勢で胎児のように丸くなり、体の内側からわいてくる寒気さむけとたたかっている。

そろそろ昼どきだが、休日なので同宿人たちも出かけているのか、そんなに物音はしない。義彦としてはテレビをつける気にもならず、できれば眠ろうとしている。

でも、頭の中にはとりとめのない思いが次々にわいてくるのだった。

疲れがたまっていたかもしれないな、と思う。

いつものことながら、正月があわただしかった。ほかの多くの地方出身者と同じく、彼も年末には郷里の名古屋なごやへ帰るのだ。乗車率二〇〇パーセント近い新幹線の自由席車両に立って。

久しぶりに会う両親や弟と迎える新年。そして友人たちとの顔合わせ。

彼が編集長をしている同人雑誌『漠ぼく』の会の新年会があり、それとは別の友人に会うことも

し、あれやこれやわいわいやっているうちにすぐ休みは終わってしまふ。

東京に戻って、翌日からは会社に出る。

義彦が働いているのは、株式会社フィールドという、社長を入れて従業員がたった六名の情報サービス会社だった。若者文化を切り口に、トレンド情報を大手企業に提供するという、東京以外では成立しそうな仕事をするのだ。

そこで近ごろ義彦は、最重要スポンサーであるところの、久和紡織株式会社のファッション研究センターという部署の担当をしている。つまり、ファッション研究のあれこれを、いかにも私は何でも知っているもんね、という顔でやっていくのだった。実際には、ファッションに興味を持ったことなんて、二十六歳の今日に至るまで一度もなかったというのに。

ペザント・ルックは自然回帰のエコロジー志向の中から出てきたものですが、そろそろ別なものに変わっていくんじゃないでしょうかね。

一方でジーンズはもう、若者のファッションとして完全に定着してきてますよね。あれはもう、流行現象ではないわけです。まだまだ続いていますよ。

ミニですか。まだミニスカートなんて言ってるんですか。あれはもう消えました。確かにまだミニをはいている女性も見かけますが、それはファッションではないんです。

ファッション、ファッション、ファッション……。

そんな仕事を、ひたすらこなしていくわけだ。